

フィリピン・カトリック教会の公文書における「他者」

—— 序論的考察 ——⁽¹⁾

宮 脇 聡 史 (東京基督教大学講師)

はじめに

現代は、一方で個性や差異が強調されると共に、他方で相互依存関係が深まってきた時代であるといつてよいだろう。その結果異なる立場の者たちが共通かつ重大な利害をめぐって合意形成を積み重ねる必要性が増大している。こうした中で、諸宗教もまた、かつての自己利益を軸とした公共問題に対する無頓着さや独善性を超え、自らのアイデンティティを再確認しつつ非信者、諸宗教との対話や協力関係を築く機会が増えているし、特にキリスト教において、こうした問題に対する積極的な取り組みが積み重ねられてきた。

とはいえ、基本的に他の宗教と差異化し、自らが救済の根源を保有すると任じ、自らの勢力の拡大を目指すいわば宣教的性格を有する諸宗教にとって、その対話の性質はおのずと主導権をめぐる複雑な戦略性を帯びたものとなり、それが対話の公共的な性質の阻害要因となりうると思われる。本当は伝道をしたい、本当は主導権を握りたい宗教諸派の利害

(1) 本論文は、学会発表論文、“Who are ‘Others’ for Catholic Church? — Preliminary Analyses” (in “Session 5: Who are the Religious Others? Process of Differentiation and Institutionalization” in the Philippines First Philippine Studies Conference of Japan, November 11–12, 2006, Tokyo Green Palace, Yotsuya/Ichigaya, Tokyo) に基本的に基づきつつ、加筆修正を加えたものである。

をどう調整するか、どういう対話の場作りをするか、それは地域や国の福祉、教育、社会経済的課題、生態的危機への対処、さらには資本主義社会の下での心理的・霊的な危機への取り組みのために、看過できない問題のひとつであろう。

筆者が研究の対象としてきたのはフィリピンのカトリックである。世界のカトリック教会全体としても、1965年以降キリスト教諸派や諸宗教との対話を目指してきたことを指摘できるが、フィリピンにおいて当然この問題は固有の歴史的、社会的な背景を帯びてくる。フィリピンの宗教に関して重要な焦点となることのひとつに、カトリックが「多数派」とみなされている、という点が挙げられる。これに対応して、カトリック教会が、どういう意味でカトリックが多数派であると考えているのか、その理解の仕方、及びその中で教会が果たす役割は何であると考えなのか、という問題もまた重要な事柄となってくる。実はこの教会の認識の性格こそがフィリピン・カトリック教会の政治社会への参与のダイナミズムと強く関わってきており、その意味でもこの問題は無視できない⁽²⁾。

さらに、教会は特に1980年代の民主化過程以降現在に至るまでフィリピン政治社会の諸問題について様々な主張を展開し、重要な問題に関しては必要に応じて政治的な動員をかけ、重大な局面において積極的な関与を示してきた。そうした中で、一方では今やカトリック教会は「民主主義のチャンピオン」として、国全体の社会道徳を指導する立場と自ら任じ、ある程度社会的にもその権威が認められている面があるが、同時に他方ではあくまで基本的には、信教の自由・政教分離の文脈もあり、

(2) この問題は筆者が長らく取り組んできた点であるが、当論文では直接は扱わない。以下を参照。宮脇聡史「フィリピン・カトリック教会にとっての『EDSA』」『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所、2005年）148、360-388頁、同『現代フィリピン・カトリック教会の政治・社会参与と教会刷新』（東京大学大学院博士論文、2006年）。

法的、制度的な特権を要求することなく、社会の他の多くのグループと対等な形で民主過程に参加している。この「主導性」と「参加性」の微妙な関係もまた、上記のカトリックの多数性の問題と切り離すことが出来ない⁽³⁾。

従って「フィリピン・カトリック教会は非カトリックのキリスト教諸教派、及び非キリスト教の諸宗教とどのようなかわりをもっているのか」という問いは、このような教会の政治社会的な位置と関連する形で提起されることになる。前者は神学的には「エキュメニズム（教会一致運動）(ecumenism)」と呼ばれ、後者は教会によって「諸宗教間対話(inter-religious dialogues)」と呼ばれる。以下序説的ではあるが、これらの問題を論じていきたい。

1. カトリック教会における「他者」に関わる制度とカテゴリー

カトリック教会の制度上の中心的な権威は、司教(bishop)(枢機卿2名を含む大司教16名、司教71名、引退司教24名)、及びその管轄する教区(diocese)(86教区)に帰属する。その下に小教区(parish)が置かれており小教区司祭(parish priest)がその管轄にあたっている。いわゆるトップダウンの「監督制」である。人口約8000万のうちの8割強がカトリックとされている。フィリピン・カトリック司教協議会(Catholic Bishops' Conference of the Philippines(CBCP))はしばしばフィリピン教会の代表とみなされているが、公式にはあくまで司教間の調整機関で

(3) これは、カサノヴァによる「公共宗教」に関する議論を想起させる。即ち、宗教が既に他の世俗領域と一応の分離を済ませた中で、しかし支配的影響力を行使した過去を背景に一定の影響を持つ宗教が、現代の変転する状況下でアイデンティティを再構築しつつ、この時代の危機に答えて積極的に公共領域に参与していくに至るという構図による議論である。ここでも、現代の「公共宗教」にとって避けがたい緊張関係は明らかであろうと思われる。カサノヴァ『近代世界の公共宗教』津城寛文訳、玉川大学出版部、1997年。

あり、フィリピンにおける教会全体を代表する権威は限定的なものである⁽⁴⁾。

しかし、植民地支配以降の遺制ゆえ、そしてフィリピンの政治状況の変化の文脈の中で、CBCP はフィリピンの国民政治にとって重要な存在となると共に、フィリピンの宗教状況全体にとっても要となる存在となっていた。即ち16世紀から19世紀末までフィリピンを支配したスペインはカトリック教会との事実上の政教一致体制を取り、この統治の間に、フィリピン植民地国家の形成、地方社会経済の植民地的な再編、カトリックの宣教活動に伴う各地の宗教文化の変容などに教会当局は積極的に関与してきた。20世紀初頭から数十年にわたったアメリカ統治期以降、フィリピンは信教の自由、政教分離を原則とした政治体制となるが、その中で形勢を保った教会は、1980年代の権威主義体制下での政治経済的な危機において、民主化に向けての主導的な役割を果たして今に至っている。CBCP は正式にはアジア太平洋戦争直後の復興支援組織に起源を持つが、現在ではこうした国民国家レベルでの教会の権威をかなりの程度代表する存在となっているのである⁽⁵⁾。

ここではそうした事情を踏まえつつ、あくまで序論的な試みとして、CBCP が他教派・他宗派との関係に関する問題をどう扱っているかに集中してみることにする。

CBCP の組織を見てみると、「教会一致運動問題に関する委員会 (Episcopal Commission on Ecumenical Affairs (ECEA))」と「諸宗教間対話に関する委員会 (Commission on Inter-Religious Dialogue (ECIRD))」が、いずれも「教理・宗教問題省 (Department of Doctrine and Religious Affairs)」の下にあることが分かる。CBCP には「先住諸民族に関する

(4) CBCP の公式ウェブサイト <http://www.cbcponline.net/> 参照 (2007年9月22日)。

(5) 宮脇聡史 『現代フィリピン・カトリック教会の政治・社会参与と教会刷新』、特に第2章、13-44ページ。

委員会 (Commission on Indigenous Peoples (ECIP)) が「社会サービス・コミュニケーション省」の下にある⁽⁶⁾。さらに、上記 ECIRD との関わりで、カトリック、プロテスタント、イスラームの指導者たちのフォーラムである「司教・ウラマー・フォーラム (Bishop-Ulama Forum)」がある。これは主に紛争の頻発してきたミンダナオ＝スールー地域における平和問題を取り扱っており、CBCP の文書に基づくならば、「[諸宗教間対話に関する] 委員会による恐らく最も重要なネットワークづくり」⁽⁷⁾のである。

カトリック教会指導者層の世俗社会に対する関心まで含めれば、カトリックの「外」とみなされているものは、概要次のようにカテゴリー化されていると思われる。

- (a) 世俗社会 (Secular society)
- (b) 宗教的な人々 (Religious people)
 - (b1) カトリック以外のキリスト教諸教派 (Other Christian denominations)
 - (b2) キリスト教以外の宗教 (Non-Christian Religions)
 - (b2a) イスラーム (Islam)
 - (b2b) 先住諸民族の宗教 (と文化) (Religions (and Cultures) of Indigenous Peoples)
 - (b2c) それ以外の宗教 (Others)

近年のカトリック教会指導者は平和問題への関心・関与を高めており、その典型的な反映が BUF の創設とあってよいと思われる。そのような

(6) Catholic Bishops' Conference of the Philippines, *CBCP: On the Threshold of the Next Millennium*, 1999, pp. 20-52.

(7) *Ibid.*, p. 25.

中で、「他者」の中ではイスラームは特別な位置を占めていると思われる。

2. 教会が規定する「他者」

教会による「他者」規定の問題をもう少し掘り下げるために、ここでCBCPの公文書において「他者」にあたる人たちがどのように呼ばれてきたのかを整理してみよう。

まずは教会の「司牧教書 (Pastoral Letters)」の宛先とされているものから見てみよう。興味深いことに、1960年代まで、CBCPの司牧教書はカトリック教会外の人々に宛てられた形をとったことはなかった。1970年代からは、これらが「書簡 (letters)」と呼ばれているにもかかわらず、半数以上が誰に宛てられたかについての言及のないものとなっている。そして、いくつかの教書は「神の民 (People of God)」のみならず、「すべての善意ある市民の皆さん (all fellow-citizen of good will)」「善意の人々すべて (all men of good will)」「フィリピン人同胞 (Fellow Filipinos)」「善意の人々 (people of good will)」「愛する国民の皆さん (dearly beloved countrymen)」にも宛てられている。ここから明らかなのは、教会が、特に特定の宗教にコミットしていようがまいが、とにかく「善意の」人々であるという人たちを、政治社会的な問題における対話の相手とみなしているということである⁽⁸⁾。

諸宗教に関しては、CBCP発行の*CBCP: On the Threshold of the Next Millennium* (1999) に記された上記諸委員会の公式説明をみてみることにしよう。

教会一致運動問題に関する委員会 (ECEA) は、1990年代には「プロ

(8) CBCP, *Pastoral Letters: 1945-1995*; 宮脇聡史 同上, 54ページ。

テスタント諸教会 (Protestant Churches) と良好な関係」を保ってきている、という。ただ、この文章で言及されているのはフィリピン全国教会協議会 (National Council of Churches in the Philippines) 系の教会のみであり、雑駁に言っているいわゆる「主流派」あるいは「リベラル派」とされる教会及び運動である (特にフィリピン合同教会 (United Church of Christ in the Philippines) 及びフィリピン独立教会 (Iglesia Filipiniana Independiente) が挙げられる)。他方、フィリピンにおいて一定の勢力をもっている、イグレシア・ニ・クリスト (Iglesia ni Kristo)⁽⁹⁾、福音派諸教会 (evangelicals, 特にフィリピン福音主義教会協議会 (Philippine Council of Evangelical Churches) によって代表される) 及びペンテコステ・カリスマ派 (Pentecostal Charismatics) とされる諸教会などは、直接の対話の相手として挙げられていない。但し、カトリック教会は彼らとの対話に開かれており、実際に個別の話し合いの場はいろいろな形でたれている⁽¹⁰⁾。

他方、諸宗教間対話に関する委員会 (ECIRD) は、主要な対話の相手として「ユダヤ教、ヒンドゥ教、仏教、イスラーム教、及び伝統的な民族宗教 (Judaism, Hinduism, Buddhism, Islam, and traditional ethnic religion)」を挙げているが⁽¹¹⁾、「イスラーム教 (Islam) と伝統的な民族

(9) イグレシア・ニ・クリスト (キリストの教会) は1914年にフェリックス・マナロ (Felix Manalo, 1886-1963) によって創設されたキリスト教系の宗教で、聖書主義を掲げつつも、自らを神の最後の「使い Sugo」とし、イエス・キリストの神性を否定、またイグレシア・ニ・クリストのみを真正の教会とする点が教理的な特徴である。また、国政選挙の際教会当局の指示に従って信徒が特定候補者に投票することでも知られている。

(10) CBCP, *CBCP on the Threshold*, pp. 24-25.

(11) 「伝統的な民族宗教」は上記の引用箇所及びもう一箇所は単数形で書かれており、他方も一箇所では複数形で記されているため、明瞭でない面もあるが、教会 (委員会) は、いわゆる「伝統的諸宗教」の多様性についての知識はあるが、同時に「それらは事実上同じようなものだ」という風にみているのではないかと考えることは出来そうである。その点は、彼らが年に一度「まとめて」対話の場を設けていることから

諸宗教 (traditional ethnic religions) がフィリピンにおける主要な非キリスト教の宗教であるので、委員会はこれらの二つの宗教 (these two faiths) にその活動を集中させてきた」としている。但し、近年始まった道教 (Taoism) 及びヒンドゥ教との対話への言及もある。

キリスト教諸派と非キリスト教の両者は、ある意味で対照的であるといえる。キリスト教会に関しては諸教派の中から対話の相手を注意深く選び取っているのに対して、非キリスト教に関しては、比較的単純化されたカテゴリーで対話の相手を考えている。それは、イスラーム教をウラマーによって代表させたり、本来多様性のある「伝統的な民族諸宗教」を時には単数形で一括して述べたりするところにも表れている。

3. 教会の「他者」描出

CBCP の司牧教書の題を見る限り、以下のものが他宗派・他宗教と特に関連が深い。

「フリーメーソンに関するフィリピン教会指導者の声明 (Statement of the Philippine Hierarchy on Masonry)」, 1954年1月14日

「YMCAに関するカトリック教会指導者の合同声明 (Joint Statement of the Catholic Hierarchy on the YMCA)」, 1954年8月15日。

「ホセ・リサール博士の小説『ノリ・メ・タンヘレ (私に触るな)』及び『エル・フィリプステリスモ (逆賊)』に関するフィリピン教会指導者

伺える。さらに、フィリピン地域研究との関連でいうならば、こうした外から観察して単数化するラベリングの仕方には、庶民の中の宗教性に対して教会関係者が一括した形でしばしば用いる「民間カトリシズム (Folk Catholicism, 単数形)」「民間信心 (Popular Devotion, 単数形)」及び「低地キリスト教徒フィリピン人 (lowland Christian Filipinos)」といった単純化されたラベリングにも通ずるものがあるのかもしれない。Ibid., pp. 25-26.

の声明 (Statement of the Philippine Hierarchy on the Novels of Dr. Jose Rizal; Noli Me Tangere and El Filibusterismo)], 1956年4月21日。

「教会一致運動委員会に関する司牧教書 (Bishops' Pastoral Letter on the Ecumenical Council)], 1962年2月9日

『『よいものを堅く守りなさい』根本主義者グループに関する司牧声明 (“Hold Fast to What is Good”: Pastoral Statement on Fundamentalist Groups)], January, 27, 1989年1月27日。

司牧教書が現在までに200ほど出されていることを考えると、この数は明らかに少ない。また、5つのうち1962年の文書を除いた4つは外部の影響力のある団体や動きへの警戒や批判を示すものであり、逆に言えば教会の利権に対する脅威を感じない限り教会が他宗教に対してあまり関心を持ってこなかったのではないか、と思える。この点に関連して、ミンダナオ＝スルーにおける宗教対話に関わりながら研究してきたラルース (William Larousse) は、カトリック教会のイスラーム教徒コミュニティとの対話について『『フィリピンはキリスト教国あるいはカトリック国だ』と繰り返し言及するという無神経な姿勢』を指摘している⁽¹²⁾。

1960年代以前の教会には、多数派宗教としての支配的地位を保守しようとする態度が明瞭に存在した。その結果、他宗教との関わりについても、この「キリスト教国」のただ中で少数派でありながらダイナミックで急速に増大しつつあるような宗教や思想、として脅威とみなして攻撃する、という形をとりがちであった。それは特にプロテスタント、世俗的民族主義者、フリーメーソンに向けられた。1962-65年に開催された第2バチカン公会議の影響は徐々に現れ、非カトリックに対する態度は友好的対話へとシフトしていったが、「根本主義」新生運動 (born-again

(12) William Larousse, *Walking Together Seeking Peace: The Local Church in Mindanao-Sulu Journeying in Dialogue with the Muslim Community (1965-2000)*, (Quezon City: Claretian Publications, 2001) 350.

movements) やイグレスシア・ニ・クリストのように熱心で急成長しつつある宗教に対しては、カトリック教会指導者層はしばしば非難の矛先を向けてきた⁽¹³⁾。

興味深いことに、ミンダナオのイスラーム教徒や「ルマド (Lumads, ミンダナオの先住諸民族)」についての言及が、CBCP の公文書の中にほとんど見られない。ミンダナオ＝スルーが1970年代を通して教会の社会活動や急進的な神学の震源地であったにもかかわらず、またこの時期激しい分離独立戦争が展開し、その要因のひとつとして宗教対立が指摘されてきていたにもかかわらず、そしてミンダナオ＝スルーの諸教会がこれらの問題について活発に論じ、取り組んできているにもかかわらず⁽¹⁴⁾、CBCP の司牧教書でミンダナオとイスラーム教徒についての言及があるのはやっと1977年になってからである⁽¹⁵⁾。その後も司牧教書におけるミンダナオやイスラーム教徒への言及は非常に少なく、管見の限り1990年代の末まで見ても、9つに過ぎない。しかもそのうち3つは司祭の殺害に関するもので (いずれも1990年代)、2つは平和状況に関するもの (1977年, 1984年)、イスラーム教徒の宗教や文化にふれたものは4つに過ぎない (1985年, 1986年 (2つ), 1997年)。

さらにその4つにおいてCBCPがイスラーム教徒についてどう言及しているか見てみると興味深い。驚くべきは次の言及である。

私たちはすべての信仰ある人々に訴えます。すべてのキリスト教徒、すべてのイスラーム教の兄弟姉妹たち、そして神の前に祈ることに力

(13) 多少皮肉な言い方をすれば、プロテスタント「主流派」は数のうえで著しい成長をもはや見せておらず、カトリック教会にとってはある意味「安全」な存在になっているのに対し、いわゆる「根本主義者」はそうではなくやはり脅威である。もちろん「根本主義者」やイグレスシア・ニ・クリストの側の非対話的な傾向も無視できない要因ではある。

(14) Larousse, *op. cit.*, 325-406.

(15) “The Bond of Love in Proclaiming the Good News”, in *CBCP Pastoral Letters*, 477-482.

があると信じるすべての人々に。是非（それぞれの人々やコミュニティごとにもっともふさわしいと思われる仕方）この祈りと懺悔の「新しい十字軍（new crusade）」に加わってくださるように、と⁽¹⁶⁾。

さらにもうひとつの教書では、CBCPは、イスラーム教徒に、聖母マリアへの祈りに加わるよう呼びかけている。

そしてカトリック外の信仰をもつすべてのフィリピン人同胞、特に私たちのイスラーム教徒の兄弟姉妹たち（あなた方の聖典と伝統において聖母は特別な位置を占めているのです）、私たちは、皆さんも私たちと共に、この年、まことの和解と平和を求めて祈るよう呼びかけます。⁽¹⁷⁾

これでは宗教間対話というよりはカトリックの礼典への招きになってしまっている。

4. 今後の議論と研究に向けて

この問題については、以上のようにごく簡単に振り返ってみるだけでも、カトリック教会指導者層の公共的なスタンスとしての多宗教多文化の平和共生という立場と、他方に消えがたく残る「カトリック的かつ国民的」なビジョンとの間に存在するある種の緊張関係のようなものが浮かび上がってくる。肯定的に捉えるにせよ否定的に捉えるにせよ、フィ

(16) “One Hundred Days of Prayer and Penance for National Reconciliation, Unity and Peace”(August 6, 1986), in *Pastoral Letters*, 627-639. カトリック教会がこうした繊細さを欠く表現を何故選んでしまったのか、その点もまた興味深い。

(17) “The Marian Year 1985: A Pilgrimage of Hope with Our Blessed Mother: Pastoral Exhortation on the Marian Year, 1985” (February 2, 1985), in *Pastoral Letters*, 593-602.

リピンにおいてカトリック教会には長きに渡る公的な歴史というものがあり、その結果として、このいよいよ多元化し多文化的になっていく社会のダイナミズムの中でもなお、カトリック教会は、この「カトリックが圧倒的多数を占める国」において要となる存在であり続けている。

この問題の背後にはカトリック教会指導者層の「キリスト教国」におけるアイデンティティ問題があるように思われる。そして、この問題はまさに「教会人」にとってもっとも手ごわい「他者」である人々、即ち、教会が届ききれていない「カトリック信者」の多数派、すなわち「民間カトリシズム」の信奉者たちに関わる問題なのである。教会当局者は「これらの人々の「疑わしい慣行」を否認して場合によっては少数者になることも辞さず、むしろ再度宣教することで使命を果たす」というような断固たる立場に立つこともできず、さりとて、民間の諸信心の多様なあり方の現実に忍耐強く接近し下からの統合を模索することに徹することも十分には出来ていない。あえて言えば、こうした人たちに、特に「貧しい人々」と規定される人たちに関与することを理由として、CBCPや司教たちは、政治的、社会的なプログラムを配置しているとも見られるかもしれない。こうして教会はこれらの普通のカトリック信者の「多数派」をいわば真空地帯の中間に置いてしまい、事実上、「カトリックではあるが成熟に達することがない」それ故に「上から指導する人たち、教会の指導者たちを永遠に必要とする人々」とする。こうして指導者たちは自己正当化され、しかし人々に十分な指導がなされることはありえない、という仕組みになってしまう⁽¹⁸⁾。

無論こうしたことは意識的に行なわれているのでもなければ、居丈高に行なわれているわけでもない。むしろ、教会指導者層としては、多様

(18) 宮脇，同上。

性の中で統合を目指す国の中で、また「公共宗教」でありつつその支配的な地位が揺らぎつつある現状の中、いかに教会として、またフィリピン社会の指導的立場の一角をなすものとして、自らを再定義するか、という点で格闘しているのだと思われる。積極的に平和構築と宗教間対話に取り組んでいる例えばミンダナオ＝スールーの現場レベルの知恵のようなものが、今後どのように積極的に取り入れられるかが、CBCP 及びフィリピンの教会指導者層全体のこうした自己再定義の方向性を定めることになるのかもしれない。

現代において、時代の要請の中で、宗教諸派も真にその救済の力を世界に表明しようとするのであれば、まさに救いを必要としている世界の様々な危機のただ中に、他者との対等な関係を保ちつつ参与していくことが問われているといえる。その中で、フィリピン・カトリック教会は、その政治社会的な状況に答えて発言し、行動しようとしてきたという意味で「公共宗教」としての役割を自覚的に負おうとしているといえる。しかし、「公共」という概念には、常に行政の担う「公」のミニチュア版となってしまう陥弊があるのではないか。すなわち、多くの人々と対話し、声なき人の声を合わせる努力をしていながら、いつしか、ある種の権力性ないし権威性を帯びて、社会の多様なニーズを一定の「公共の利益」の名の下に一方的に代弁してしまうという陥弊であり、いわゆる「市民社会」なるものは、しばしばこの点でそのエリート性を繰り返し批判されてきたし、市民社会運動の中からも、この点に答えるための様々な努力が折り重ねられてきた。

他方で現代における宗教の復興も、あくまで草の根からの伝統宗教の再発見という面も大いにある、という点を無視できない。だから、この宗教復興のうねりを背後にした宗教指導者たちは、これを伝統宗教の中

で正当性原理を得ている自らの地位の無条件の承認と復興である、と理解するならば状況を読み違えることとなるであろう。

現代において、宗教がこれまでのように私的な領域にとどまることをもって安んじることは、自らが保持すると主張する救済の力を覆い隠すことになるであろう。しかし、現代における「公共領域」は、決して穏やかな不変の公共善をたゆみなく追求するいわば善人の共同体などからは程遠く、あくまで定義から内容、過程に至るあらゆるところにおいて利害の衝突と論争性を常にはらむアリーナ（競技場）であることは賢明に理解しておくべきであろう。と同時にその中でも、少なくともキリスト教であってみれば、その創始者に倣い、主導権を握って支配的に臨もうとするような権力闘争とは異なる仕方で、参加するのがそのアイデンティティにふさわしいのではないか。この点は、常なる問いであるべきではないかと考える。